筑紫野市指定文化財

高橋紹運首塚伝承地

史跡（昭和59年11月1日指定）
面積　89.10㎡

黒田藩の儒者貝原益軒が元禄16（1703）年に完成させた『筑前国続風土記』の中に、「紹運塚」として記載されています。引用すると、

「二日市村の艮なる高き岡の上にあり。高橋紹運の頸をうつめし所と云。薩摩勢、紹運の頸を取、実検の後此所に埋たるなるべし。長二間二尺許、横七尺許なる塚也。近き世にはめつらしき忠臣義士の墓なれは、いとたふとむへき事にこそ。」

と、述べています。首塚の規模が記録されていますが、残念ながら高さが記されていません。

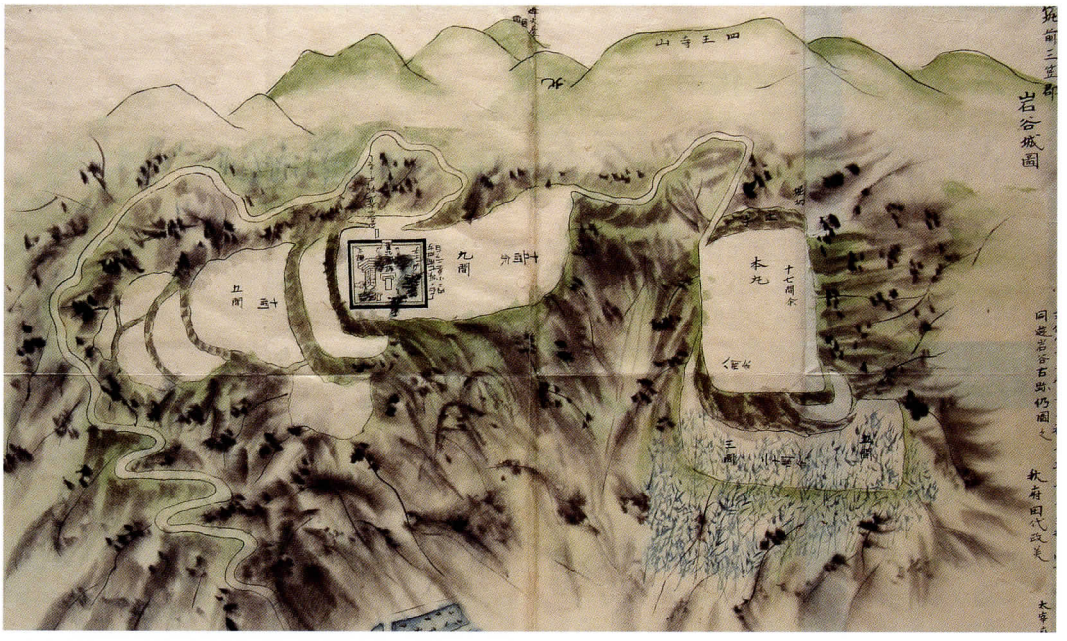
当該地の地籍は旧大字二日市271-1、通称京町です。現在の地番は二日市北2丁目14番1号となっています。現地へは、西鉄二日市駅から北東方向へ指呼の間にあります。県道35号線を太宰府五条方向へ向かって、まず西鉄の線路を横断して、二つ目の二日市京町信号機を直進し、九州労働金庫を右側に見て、左側の傾斜のきつい坂道を4～5分ほど登ると頂部にいたります。木鶏塾妙音教会の反対側に位置し住宅地の一画をなしている所です。周辺には、奈良時代の寺院である般若寺塔跡や重要文化財の般若寺石造七重塔があります。

さて、首の主である高橋紹運とはどんな人であったか紐解いてみましょう。

紹運は、大友家に仕える武将で、実名を鎮種といい、天文17（1548）年から天正14（1586）年、39才で亡くなっています。吉弘鑑理の次男として生を受け、高橋家の名跡を継いで、官途は三河守、剃髪して三河入道紹運と名乗っています。元亀元（1570）年に筑前御笠郡の岩屋・宝満両城の城督に就任し、御笠郡を中心に筑前南部の軍事、行政の拠点として領有していました。立花城督戸次（立花鑑運）道雪とともに大友氏支配を維持するために働いていました。子の統虎（立花宗茂）を戸次家に養子に出し、自分の後継者は統増（立花直次）として、天正12（1584）年道雪とともに龍造寺氏を抑えるため筑後に遠征軍を組織、豊後の大友勢と共同行動を取っていましたが、翌年9月同僚の道雪が病に倒れたため撤退を余儀なくされました。その筑後に出征中に筑紫広門が統増の守る宝満城を奇襲して奪われましたが、統増と広門の娘を婚姻させるということで和解が成立して、それの婿引出物として統増夫妻が宝満城を守ることとなり、紹運は岩屋城に入ったのです。岩屋城は文明10（1480）年前後に長門の大内氏が軍事的な拠点として築城したもので、後日、大友氏は筑前の要として宝満・岩屋・立花城をもって展開しています。そんなおり、龍造寺隆信が島津・有馬軍と肥前島原で戦って敗死し、その後、龍造寺家は衰退していきます。天正14（1586）年薩摩の島津氏は勢力をのばし、筑後を制圧して筑前に迫り、紹運がいる宰府へ侵入してきます。島津義久は岩屋城へ降伏勧告を行いましたが、失敗に終わりました。島津勢は1ヵ月以上岩屋城を包囲して、本国の残留部隊まで呼び寄

高橋紹運首塚

岩屋城遠景（首塚付近より）



筑前三笠郡岩谷城図（個人蔵／『九州歴史資料館研究論集32』より）

せ、紹運が籠る岩屋城への攻撃に備え7月27日早暁、島津直属軍を全面に立てて一斉に攻め掛かって、同日夕刻には落城しました。紹運は自害し、城主以下760余名が籠城戦の末全員討死しました。寄手の島津勢は、3,700余人の死者を数えます。この戦闘のため日向から呼び寄せた宮崎衆の侍頭の上井覚兼をはじめほとんどの者が負傷し、あるいは討死し、ほかの島津主力軍も同様に大打撃を受けました。自刃した紹運の首が切られ、本営のある般若寺と呼ばれた場所で、義久によって首実検が行なわれ、その首を埋めて塚を造ったのが伝承地として指定された当該地です。

塚の大きさは『筑前国続風土記』に記されたものとおおよそ一致しています。塚の周囲を保護するために、後世に石垣で保護したもので、高さは頂部まで2.30m前後を測ります。石垣の四方に天板があり頂部が50㎝前後こんもりと出て、それからなだらかに四方の天板にいたっています。前面には地域の人が祭壇を設けて祭祀を行っていました。

紹運が自刃した3ヵ月前に、大友宗麟は大坂城で豊臣秀吉に会い、島津氏の討伐を願い出ています。それを受けて秀吉は諸大名に九州征伐の指示を出したわけです。その結果、島津氏は秀吉の前で降伏し、薩摩・大隅の二国が安堵され、大友家は結果的に救われ豊後国が秀吉によって安堵されたわけです。紹運達の犠牲の上に大友家は守られたのです。（副島邦弘）

〈参考文献〉

『筑前名所図会』、『大宰府・太宰府天満宮史料』、岡寺良「大宰府岩屋城の研究上・下」『九州歴史資料館研究論集31・32』九州歴史資料館、『戦国武将合戦事典』、『戦国人名辞典』、『国史大辞典』、『名将言行録』等

2014. 3.31. 発行